

---

# ぱすてるチャイムContinue After Story

ケイ・アイク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぱすてるチャイムContinue After Story

### 【Nコード】

N6691X

### 【作者名】

ケイ・アイク

### 【あらすじ】

恋人である雑原ユウキが冒険に旅立つてから二年、セレス・ルーブランは光綾学園で教師を続けていた。そんな時、セレスに衝撃の知らせを耳にする。雑原ユウキが指名手配された。事の真相を確かめるため、セレスは数年ぶりの冒険へと旅立つ。

## オープニング（前書き）

ばすチャCのその後です。

ユウキ×セレスのカップルとなります。

それに嫌悪感を抱かれる方は、引き返してください。

## オープニング

ここは二つの大きな大陸が存在する世界。

一つはルーベンス大陸。もう一つはコルウェイド大陸。

その二つの大陸の間には、ライの海と呼ばれる大海が隔てている。

そして、この物語はコルウェイドにいる一人の少年から始まる…。

\*

「コルウェイド」

コルウェイドの山中で、一人の少年少女が走っていた。

「はあ、はあ…」

一人の二十歳近くの少年が息を荒くしながら走っている。

そんな少年の前を走っていた少女が立ち止まって、少年のほつに振り返る。

「大丈夫ですか…?」

「ああ、何とか…。すまないな、助けてもらって…」

「いえ、偶々ですから…」

少年の言葉に少女はそう答える。

「これから如何するのです？あなたは今、世界で敵と見なされていますよ……」

少女は少年にそう言った。

「そつだな……」

少年は何か考え込むようにそう言った。

\*

Ⅱ 光綾学園女子寮 セレスの部屋Ⅱ

場所は変わって、ここはルーベンス大陸。

六つの大国があり、その内の一つであるラストル。そこにある冒険者学校の一つ、光綾学園。

「もぐもぐ……、ずずず……」

一人の女性が部屋で肉まんとお茶を飲み、テレビをつけながら寛いでいる。

彼女の名はセレス・ルーブラン。光綾学園のスカウト教師である。今日の勤務を終え、一息つくセレス。

「ふつ……、もうこんな時間ですか」

ふと壁に掛かっている時計を見ると、もう時刻は日が変わろうと  
していた。

「あら…」

セレスは時計の下に掛かっているカレンダーに目を向ける。

「もう…、あれから二年経ったんですね…」

二年前、セレスは当時三年生だった一人の男の子に告白された。

男の子の名は、薙原ユウキ。

ユウキはダンジョン実習の時、仲間を誰も誘わず、ずっと一人で  
行っていた。

それを心配したセレスは仲間の大切さを教えるため、ユウキと一  
緒にダンジョンへと潜った。

だが、その時ユウキは勝手に単独行動をとり、モンスターの群れ  
に襲われて怪我を負ったのだ。

それをセレスに指摘され、ユウキは自分の間違いに気づいたのだ。  
ユウキはそれを教えてくれたセレスに恋をした。

そして聖誕祭の日に、ユウキに告白された。

「薙原くん…、今頃どうしているのでしょうか…」

心配そうな顔でセレスは言う。

冒険に出る時と帰る時には、連絡は必ず入れてくれた。  
それが最近、連絡がないのである。

「……………」

ユウキに大好きな肉まんをご馳走してくれた事。

キーホルダーをプレゼントしてくれた事。

セレスにとって、ユウキのしてくれた事はとても嬉しい事ばかりである。

その中で一番嬉しいのは、ユウキから告白された事である。

ユウキからの告白で、セレスはユウキの事を好きになったのだから。

「あ、いけない。もうそろそろ休まないと…」

そう言って、セレスはテレビを消そうとするが、

『ここで、緊急のニュースをお知らせします』

ニュースの声を聞き、セレスは消そうとするのを思い止まる。

『今日、一人の冒険者が、全国に指名手配されることになりました』

普段ならば聞き流す程度であつただらう。次の言葉を聞かなければ。

『その冒険者の名は、薙原ユウキ』

セレスの頭は、真っ白になった。

「…え？」

『その冒険者はコルウェイドで』

セレスの耳には、その先の内容は耳に入っていなかった。

「薙原…くん…」

今ここに、運命の歯車が回り始めた…。  
世界を舞台にした物語の歯車が…。



## オープニング（後書き）

短くなりました…。今後もおそらくこの程度の短さかと…。  
それでもよろしければ、どうかよろしくお願いします。

## 一話目

Ⅱ 光綾学園校舎Ⅱ

「……」

セレスは重い足取りで廊下を歩いていった。

理由は言うまでもなく、ユウキが指名手配を受けた事だ。

その知らせを聞いてからこの一ヶ月の間、余りの衝撃にセレスは教師の勤めが覚束おぼつかなくなっていた。

「はぁ……」

重苦しいため息を吐いて、セレスは一つの部屋の前に立ち止まる。

その部屋は光綾学園の園長室。

セレスは学園長に呼び出されたのだ。

コンコンッ

力無い手で園長室のドアをノックするセレス。

「誰ですか？」

ノックの後に園長室から聞こえた声にセレスは答える。

「…セレスです」

「入りなさい」

か細い声のセレスに入るように言われ、セレスは園長室に入る。

「……………」

一声も出す気力がない程セレスは暗い表情だった。

そんなセレスに学園長、ベネット・コジュールが声をかける。

「セレス先生」

「……………」

「ここ最近元気がありませんが、何かあったのですか？」

「……………」

ベネットの言葉に返答しないセレスを見て、ベネットはため息を吐く。

「薙原くんのことでしょうか？」

ベネットの言葉にセレスは驚く。

「ど、どうして……」

「言われなくともわかります。あなたの事を何も見なかったと思ってましたか？」

驚いているセレスにベネットは言葉を続ける。

「コルウエイドのギルドにいる冒険者から連絡がありました。薙原くんはコルウエイドで冒険をしていたそうです」

「……………」

「それがある時、コルウエイドにあった一つの村が滅ぼされたので  
す。今ニュースでも、その話題で持ちきりです」

そうベネットは言ったが、セレスはユウキの事で何も知らなかつ  
た。

その話とユウキに何が関係しているのか、セレスはベネットに聞  
いた。

「…それが雑原くんと何の関係が？」

「生き残った村人からそういう話を聞いたそうです。一人の見知ら  
ぬ少年がそう名乗ったと…」

そう言うベネットも辛い表情であった。

自分の学園の卒業生がそんな事するはずがないと思いつながらも、  
この話題を切り出すのは辛いものがある。

だが、それ以上に辛いのはセレスの方だ。

自分の恋人がこんな事になってしまったのだから。

「……」

「セレス先生」

落ち込むセレスに、ベネットは言った。

「雑原くんを探しに行きなさい」

「…え？」

何を言われたのか分からなかった。

セレスはそんな表情だ。

「雑原くんの事…、好きなのでしょう？」

その言葉にセレスは顔を赤くした。

「えー!? えっ…、ど、どうして…?」

「そのくらい分かります。二年前から薙原くんに好意を持っていたのでしょう? それに、薙原くんも…」

「は、はっ…」

ベネットの言葉にセレスは何も言えず、ますます顔を赤くした。

「それに、協力者もこちらに来るように言っておきました」

「え?」

ベネットの言葉の意味が分からず、セレスが首を傾げた時、

コンコンッ

「ベネット先生」

入り口のドアがノックされ、その向こうから声がした。

(え…、この声…)

聞こえた声はセレスにとって聞き覚えのある声だ。

「来ましたね。入りなさい」

「はい、失礼します」

ベネットがそう言い、ドアが開かれると、三人の女の子が入ってくる。

「あ…！」

セレスはその女の子達の姿を見て驚いた。

「お久しぶりです、セレス先生、園長先生」

メガネをかけた女の子がセレスとベネットにお辞儀をして挨拶すると、

「お久しぶりです！」

「お久しぶりです。二年ぶりですね」

紫色のツインテールの女の子が元気な声で挨拶して、続いて猫耳のアクセサリーとリボンをつけた女の子が挨拶した。

「お久しぶりです、シルビアさん、フィルさん、ぼたんさん。三人とも、元気そうだなによりです」

先程の特徴の順に、

シルビア・コール

フィル・イハート

鈴木ぼたん

三人とも光綾学園の卒業生であり、セレスのクラスの生徒だった。

「シルビアさん、フィルさん、ぼたんさん、本当にお久しぶりです。でも、どうして…」

二年ぶりの再会に喜ぶセレスだが、何故三人がここにいるのかわからなかった。

そんなセレスに、ベネットが答えた。

「私が頼んだのです。薙原くんの事に、セレス先生と協力してほしいと」

「ベネット先生…」

ベネットはセレスの知らないところで色々としてくれたのである。

「セレス先生、いえ、セレス・ルーブラン。あなたはこれより冒険者として彼女らと共に行きなさい」

「あ…」

セレスの心を汲み取り、色々と準備をしてくれた。

そんなベネットに、セレスは涙を堪えながらも、はっきりと答えた。

「…はいっ!!」

そう答えたセレスの顔には、さっきまでの暗さはなかった。

これより冒険が始まる。

セレスにとつての、数年ぶりの冒険が。

恋人探しの冒険が。

だが、これが世界の命運をかけた大きな戦いの幕開けになるとは、誰も予想すらしなかった。

## 一話目（後書き）

ばすてるチャイムContinue本編じゃあ一部しか出てこなかったセレス。

なら、その後の話で冒険に出しちゃえという妄想で作った話です。

では、次回にあいましょう。



## 一話目

「コルウエイド行きの船 甲板」

ザザーン…

海の波が音をたてながら、ルーベンスからの船がコルウエイドへ向かって進んでいる。

その船にはセレス達が乗っていた。

ベネットはこの日に船が来る事も計算して、あの日にセレスを呼び出したのだ。

(コルウエイド…)

セレスはコルウエイドに渡った事はあるが、それは数年前までの話だ。

今コルウエイドがどうなっているのか、それはセレスには分からない。

それよりも実力のほうだ。

数年前から冒険を捨てて教師となった。

冒険者学校の教師とはいえ、腕が落ちたかもしれない。

もっとも、それはもう本人は分かりきってる事なのだが。

「あ、先生」

そんな時、フィルとぼたんがセレスのところに来てきた。

「海を眺めていたんですか？」

「ええ、とても綺麗な海ですから、ずっと見ていたくなります」

そう言うセレスの視界には、一面太陽の光を浴びてキラキラ輝いている海面が映っている。

「それで二人とも、卒業してからどう過ごしてました？」

セレスはフィルとぼたんに卒業後はどうしていたのかを訊ねた。

「私はルーベンスに残っていました。向こうでは同人活動はなかったので、コルウェイドへ行くのは今回が初めてです」

ぼたんが淡々と話し、続いてフィルが続く。

「ボクはユウキについて行って、コルウェイドのギルドで働いていたんだ。けど…」

そこでフィルの声が暗くなった。

「そんなある時なんだ…、今回の事件がでてきたのは…」

「あ…」

フィルの言葉にセレスは暗い表情になる。

「新大陸に行つてからのユウキは凄かったよ…。ボクと一緒にギルドに入ったのに、凄い勢いでどんどん仕事をこなして、ギルドに所属してから一年くらいかな…。別のギルドで新しく入った人達の指導を頼まれたんだ。ボクも一緒に行きたかったけど、ボクは呼ばれ

なかったから…」

フィルはユウキについていったものの、ギルドからの指令で離れてしまったのである。

「それからだよ…。ユウキが指名手配されたって聞いたの…」  
「…そうでしたか」

フィルの話聞き、ますます暗くなるセレス。

「けど、ボクはこんな話信じない！！ユウキが指名手配なんて、何かの間違いに決まってる！ボクは絶対にそれを証明するんだ！」  
「フィルさん…、そうですね。落ち込んではいけませんね！」

そういうフィルの決意に、セレスも明るくはつきりと言った。

「みんな、そろそろコルウエイドに着くわ」

そんな時に、船内にいたシルビアがセレス達のところにやってきた。

「はい。あの…、シルビアさん、フィルさん、ぼたんさん、今回は本当にありがとうございます。一緒についてきてくれて、とても心強いです」

セレスはシルビア達に感謝の言葉を言った。  
そんなセレスにぼたんが言う。

「いえ、ベネット先生からの頼みですし、今回私にとって、コルウエイドに行くのは都合が良かったので…」

「えっと、ぼたんさん？都合が良いというのは…」

「さつき新大陸に同人が無いと言いましたが、その同人を新大陸に広めたいとか考えてたんです。そういう意味では、今回の話は私のためでもあるのです」

「そうですか。良い目標ですね」

「うん、ボクも応援してるからね」

「ありがとう、セレス先生、フィール」

エールを送ってくれたセレスとフィールに礼を言うぼたん。

「それで、シルビアさんはどうして新大陸へ行こうと思ったんです？」

セレスは次に、シルビアにそう訊ねた。

「ベネット先生から頼まれたというのもありますが、実家の都合が一段落ついたので…」

「実家のご都合ですか？」

「実は、母がお世話になっている病院の先生と再婚する事になったんです。それで新大陸に行けるかもしれないと思った時に、今回の話が来たので…」

「そうなのですか！シルビアさん、おめでとうございます！！」

「おめでとう、シルビア！！」

「あ、ありがとうございます…」

セレス達の言葉に照れながらも、お礼を言うシルビア。

「みんな、港町が見えてきたわ」

ぼたんがそう言い、セレス達も港町がある方に目を向ける。

コルウェイドでの、最初の冒険の舞台となる港町に。

\*

「オーシャの港町 港」

オーシャの港町。

ルーベンスからコルウェイドにやってくるには、必ずここに船が来る。

人が沢山いて活気がある場所である。

セレス達は船から降り、港の広いところへと歩を進める。

「ふふっ…、懐かしいです。この町の活気だけは、時間が経っても変わりませんね」

数年ぶりの冒険に、セレスは心躍っている。

「先生もコルウェイドで冒険したの？」

「もちろん。あの時も初めての新大陸にドキドキしましたから」

フィルの言葉にセレスはそう答えた。

（ただ…、今回の雑原くんの事で来るなんて思ってもいませんでした…）

皮肉にも、ユウキの指名手配の真相探しで来る事になった今回の冒険。

悲しく思いながらも、セレスは言葉にはせず心の中でそう吐いた。

「それで、フィルさん。ここに迎えの人が来るって聞いたけど……」  
「うん、ここに来る事になってるけど……」

そんな時だった。

「フィルーツ！」

フィルの名前を呼ぶ、聞き覚えのある少女の声が聞こえた。  
茶色のツインテールの少女がこちらにやってくる。

「あ、リナ！」

フィルが少女のほうを向いて手を振る。

「久しぶり、フィル！」

「うん、リナも久しぶり！」

少女の名は、竜胆リナ。

光綾学園出身の冒険者であり、フィル達と同じクラスメート。  
そして、雑原ユウキの幼なじみである。

「セレス先生、お久しぶりです。ぼたん、委員長も久しぶり」

「竜胆さん、お久しぶりです」

「リナも、久しぶりね」

「竜胆さん……、もう私は委員長じゃないのに……」

「ご、ごめん。つい学園での呼び方で呼んじゃって……」

名前で呼んでくれなかった事にシルビアが不満を言い、謝るリナ。

「迎えの人って、竜胆さんの事だったんですね」

「はい、ベネット先生から、セレス先生達が来るってお聞きしましたので」

リナは言葉を続ける。

「セレス先生、本当にありがとうございます。今回の事は、正直シヨックでしたので…」

「…薙原君の事ですね…」

言いつらくしても、そう言葉にするセレス。

「ええ、まさかユウキがこんな事になるなんて、夢にも思ってたんですけど…」

「…」

幼なじみに起こった事にシヨックであるリナ。

リナの言葉にセレス達は黙ってしまふ。

「でも、私はユウキがこんな事をするなんて思ってません！何としても、間違いだって証明したいんです！！」

「竜胆さん…」

リナの奮い立たせるような言葉に、セレス達も笑顔に答える。

「そうですね、今は落ち込んでる場合じゃありません。そのために、私達は前に進んで行かないと」

「はい、先生！」

「ボク達でユウキを助けるぞーっ！！」

自分に、そして教え子達にも元氣付けるように、セレスはそう言った。

そんなセレスにリナ達も頷く。

「それでは、ギルドのほうに案内します」

「はい、よろしくお願いします」

そう言って、セレス達はリナの後をついていく。  
新大陸での、冒険の第一歩が始まる。



## 二話目（後書き）

言い忘れてましたが、わたしは前作のほうはプレイしていませんので、前作のことについては何も知りません。もしかしたらこれから話でも何か違うところが出てくるかもしれませんが、その時はご意見があればお願いします。

## 三話目

「オーシャの港町 冒険者ギルド」

リナ案内で、セレス達はギルドへとやってきた。

「ただいま戻りました！」

ギルドのドアを開け、リナは帰りの報告をする。

「帰ってきたね、待っていたよ！」

ギルドに入ると、そのカウンターに一人の男が立っている。

おそらくこのギルド長なのだろう。

ギルド長はセレス達を見て言った。

「このギルド長のミッシェルといいます。リナ君から話は聞いていますよ。君達が協力者なんだね？」

「あ、はい。セレス・ルーブランです」

「シルビア・コールといいます」

「鈴木ぼたんです」

ギルド長の言葉にセレス達は自己紹介をする。

「そつえばミッシェルさん。あの人はまだ来てないんですか？」

リナの言葉にミツシエルは首を振った。

「ああ、まだ時間がかかるって聞いたよ」

「そうですね」

そんな二人にセレスが尋ねる。

「あの、竜胆さん。あの人達って…」

「先生達の他に、今回の件で協力してくれる強力な助っ人です。ただここに来られるのに時間がかかるみたいで…」

「そうですね」

「さて、会話も一区切りついたところで、今回の件について説明してもいいかね？」

ミツシエルの言葉に、セレス達はそちらのほうに向く。

「今回の件…、薙原ユウキ君の事で説明するよ」

「……」

ミツシエルの言葉に、場は静かになる。

「二年前に彼は、このギルドにリナ君とフィル君を連れて、三人で入ってきた。三人ともよく働いてくれたけど、特に薙原君は群を抜いて凄かったよ。次々と仕事をこなして行って、難しい事も引き受けては達成させて行って、三ヶ月も経たないうちにBクラスをもらったよ。過去に何人も冒険者がいたけど、新米でここまでできる者はいなかった程だ。それから一年くらいだ。遂には別のギルドから依頼を頼まれる程になってね。新しく入った冒険者の指導を頼まれたんだ。彼はそれを引き受けて、このギルドを去っていったよ」

「そうですね…、薙原くんは立派にやっていたのですね…」

ミッシェルの話を聞き、セレスはユウキが大きく成長していつて  
る事を強く感じた。

だからこそ、セレスはこの先の内容を聞くのが辛かった。

「そして事件が起こったのは、今から一ヶ月前だ・・・」

「……」

セレスにとって聞くのが辛い内容である。

だが、それでも聞かなければならなかった。

「このコルウエイドにある一つの村が、突如襲撃を受けた。かなり  
の大規模で、生き残ったのはごく僅かの村人達だけだった…。生き  
残った村人達の話では、見知らぬ少年が大量の戦闘型ランサーを連  
れて襲い掛かって来たらしい…。そして、生き残った村人達の前で  
その少年は名乗ったんだ…。薙原ユウキと…」

「そんな…」

話を聞いたセレスは悲しい顔をした。

他のみんなも辛そうな表情であった。

「その事件に警察が動いて…、生き残った村人から話を聞いて、村  
を襲撃したと思われる少年の特徴が…、薙原くんと同じだったんだ  
…。そして警察は、薙原くんを指名手配した…。これが、今回の事  
件についてだ…」

話を聞き終え、セレスはミッシェルに尋ねる。

「それで…、薙原くんは今どうしているのでしょうか…」

「それはわからない…。捕まったという話は聞いてないから、何処

かに逃げているんだろうが…」

せめて、何処でどうしているのか。

今のセレス達はそれも知る事ができなかった。

「けれど、いきなり指名手配だなんて、警察も短慮じゃないかしら。話を聞いただけで、その少年が薙原くんとは限らないだし…」

「そうね。第一、自ら名を名乗る襲撃犯が何処にいるっていうのよ」

シルビアとぼたんがそれぞれ不平を述べた。

「ええ。だから、みんなに協力を呼びかけたの。このままじゃ、ユウキが本当に犯人にされて捕まってしまうわ…」

「そうだよ！警察なんかには任せられない！だから、ボク達でユウキを助けるんだ！」

リナもフィルも、自分達で何とかしないと強くないと強く思った。

「…そうですね。私達で、薙原くんを助けないと…！」

自分の教え子達の強い言葉に、セレスも心を強く、ユウキを助けると決意する。

「私も微力ながら力を貸すよ。もちろん、ここでの仕事もやってもらうけどね」

「はい、分かっています」

ミッシェルの言葉にセレスはそう返事した。

「そういえば竜胆さん。あの人にも言っておいた方がいいんじゃないな

いの？」

「あ、そうですね」

「え？竜胆さん、あの人って…？」

ミッシェルとリナの言葉に、セレスは首を傾げながらそう尋ねた。

「これからその人の所に連れて行きますので。それではミッシェルさん、私達は行きますので」

「ああ、行っておいで」

「それでは、ついて来てください」

「あ、はい…」

リナについていき、セレス達はギルドを出る。

「…強い子達だね。ああいう子達にあそこまで想われて…、雑原くんも幸せ者だね…」

辛い立場に立たされていながらも、ユウキは幸せ者だと、ミッシェルはリナやセレス達を見てそう思った。

## 四話目（前書き）

遅い投稿になりました。  
申し訳ございません。

## 四話目

〓 オーシャの港町 病院 〓

リナが次に案内した場所は、病院であった。

「竜胆さん、ここ病院みたいなんだけど…」

シルビアの言うとおり、リナが案内した場所は病院であった。

「ええ、みんなに会ってもらう人がいるの」

「会ってもらう人？誰なの、リナ？」

「これから案内するわ」

そう言って、リナを先頭に病院の中へ入っていく。

そして、ある病室の前に立ち止まる。

「ここよ」

リナの言っていた、会ってもらう人がいるだろう病室。

その扉の横にかけられているネームプレートを見てみる。

「雑原シン…、えっ!？」

雑原シン、と書かれたネームプレートを見て、セレスが驚きの声をあげる。



「雑原って…、まさか…」

「リナ、もしかして会ってもらおうって…」

察したシルビアとぼたんがリナに聞く。

「さあ、入るわよ。失礼します」

リナが声をかけて病室の扉を開け、病室の中へ入った。  
セレス達も続いて入っていく。

病室の中には一つのベッドがあり、その上に一人の男性がいる。

「こんにちは」

「こんにちは」

リナとフィルがその男性に挨拶をする。

「やあ、こんにちは、リナちゃん、フィルちゃん」

男性がリナとフィルに挨拶すると、男性はセレス達の方に目を向ける。

「そちらの人達は…？」

「はい、今回の件で協力してくれる仲間達です」

男性の言葉にリナがそう答えた。

「セレス・ループランです。竜胆さん達の担任をやっていました」

「シルビア・コールです。竜胆さんのクラスメートです」

「同じく、鈴木ぼたんといいます」

セレス達は男性に自己紹介をした。

「自己紹介をありがとう。私は、雑原シン。ユウキの父親です」

男性、雑原シンも自己紹介をし、話を続ける。

「今回のユウキの件で、ご協力感謝いたします。皆様にご迷惑をおかけして申し訳ない」

「そ、そんな！迷惑だなんて思っていないません！」

シンはそう言って頭を下げると、少し慌てるようにセレスはそう言った。

「今回の雑原くんの件、本当に驚きました。まさかこんな事になるなんて…」

「私も同じです……」

セレスの言葉にシンがそう答えた。

「ユウキには、私のようになってほしくない…。もう、あのような事には…」

シンは目を閉じ、今ここにいない息子を想う。

「あのような事…?」

シンの言葉が気になり、セレスは尋ねる。

「…そうですね。皆さんには、ここで話しておきましょう…」

シンはそう言って、自らの過去を語りだす。

「皆さん…、『スレアークの虐殺事件』をご存知ですか？」

その言葉にセレスが口を開いた。

「スレアーク…、確か、十二年程前にニュースでやってたようでした…」

「はい…。スレアークという町で、多くの死傷者を出した事件です。」

シンは言葉を続ける。

「十二年前、私を含めて七人のパーティーを組んで、オプタという遺跡を探索していました。その遺跡の奥で…、一つの奇妙な箱を見つけた。その箱には瞼と口があり、鼾いびきをかいて眠っていた。その箱を私達は持ち帰り、スレアークに戻った…。だが、仲間の一人がその箱を手には、ずっとそれを眺めていた。その日も、その次の日も、彼はその箱を手放そうとはせずに、ずっとそれを手にして眺めていた…。今思えば、それが悲劇の始まりだったのだ…」

話していくにつれ、シンの言葉が暗くなる。

「そして、箱を手にはしていた彼は、私達に剣を持って襲い掛かってきた…」

「!?!」

シンの言葉にセレス達は驚いた表情をする。

「私を除いて、他の仲間達は彼の手に掛かり、死んでしまった…。私は隙をついてその箱を奪い、町を飛び出した。この箱は危険だ、人目につかない所に捨てないといけないと思いつながら…。だが、私自身も箱を手にしていればいるほど、手放すのが惜しい気持ちになつてきた…。このままでは、私自身も彼と同じように狂気を孕<sup>はら</sup>み、いつか……。いや、狂気以上の恐ろしいものが起こる…」

「…」

シンの話の内容にセレス達は何も言えなくなる。

「そう思った私は狂気に犯されない様に、自らの体を石にしたんです…。これが、十二年前に私が行方不明になつた真相です…」

そう言つて、シンは自らの過去を語り終えた。

「その…、何と言えればいいのか」

「正直…、信じ難い話です…」

セレスもシルビアも何を言えいいのか分からないように答える。

「…リナとフィルは、この話は聞いたの？」

ぼたんがリナとフィルに尋ねる。

「ええ、ユウキがお父さんと再会した翌日に、真相を話してくれたわ」

「その時のボクもみんなと同じだよ。何て言つたらいいのか分かんなくなつちやつた…」

リナとフィルも、皆と同じように暗い表情になる。

「…このような事は言いたくないが、今回の事件も、何か嫌な予感があるのです…。十二年前の、あの事件のような事がまた起こるのではないかと…」

シンのその言葉には、ここにはいない息子、ユウキに対する心配の念が込められていた。

「すみません。せっかく来ていただいたのに、このような話をしてしまつて…」

「いえ、気にしないでください。話してくれてありがとうございます。ごまかす…」

シンが頭を下げて言うと、セレスは首を振る。

「ところでリナちゃん、もう町のほうは案内させたのかな？」

シンがリナにそう尋ねる。

「いえ、これからしようと思つてたのですが…」

「そうか…、なら私も一緒に行こう…」

そう言つて、シンはベッドから降りて立ち上がる。

「あ、あの…、大丈夫なんですか？」

「なに、心配はないよ。リハビリも兼ねて歩いたほうがいいんです」

シンはそう答え、病室を出る。

「…元気な方ですね」

「うん。さあ、ボク達も行こう」  
「ええ」

セレス達もシンの後をついて行き、町へと向かった。

「…」

そんな中、リナは何処か浮かない顔をしていた。

\*

「オーシャの港町 宿屋」

町を歩き回り、一日はあつという間に過ぎて行き、夜となった。  
今、宿の部屋にはセレスを除く女性達が集まっていた。

「それにしても、薙原くんのお父さんに会えるだなんて思ってもなかったわ」

「えへへ…、ビックリしたでしょ？二年前、ユウキがお父さんと再会した時なんか、見てるこっちまで泣けてきちゃったから…」

シルビアやフィルが今日の出来事について談笑をしていた。

「…」

リナは窓から外を見つめながら、何処か浮かない表情をしていた。

「…リナ」

そんなリナに、ぼたんが声を掛ける。

「ん…？何？」

「リナ…、昼間から何か考え込んでいるでしょ？」

ぼたんの言葉にリナは慌てて答える。

「な、何言ってるの？私は」

「リナの悪い癖よ。何か考え込んだら、すぐに黙ってしまうもの。それに、あなたは感情が表に出やすいんだから」

リナの手を遮るようにぼたんは言い、言葉を続ける。

「で、何を悩んでいたの？」

「…」

ぼたんの言葉に、リナは答える。

「二年前から考えてたの…。ユウキはもう、冒険者をやめさせたほうがいいんじゃないかって…」

「え…」

リナの言葉に周りの皆は驚く。

「どうして…、リナ？」

フィルがそう尋ねた。

「ユウキは、行方不明になったお父さんを探すために冒険者を目指した…。それが叶って、幸せになったわ…。でも、それなのにユウキは危険な冒険へと飛び出した…。そんな時に、今回の件が起こっ

たわ……」

「……」

「お父さんが見つかって、ユウキはそれでも冒険する気いっぱいだった……。あの時、ユウキを引き止めていたら……。どうして二年前にそう言わなかったんだろって……。その事が頭の中を駆け回ってしまふの……。だから……」

「リナ……」

「……」

幼なじみであるユウキの心配を、リナは仲間達の前で伝えた。フィルムもシルビアもどういったら言いか分からないでいた。

「リナ」

そんな時、ぼたんが口を開いて言った。

「多分あなたがそう言っても、薙原は冒険をやめなかったと思うわ」「え……」

リナはぼたんに目を向ける。

「薙原も、お父さんを探すためだけで冒険者を目指したわけじゃないはずよ。光綾で薙原と過ごしたのは一年間だけだったけど、その一年で薙原は最もよく頑張っていたわ。その頑張りにはお父さんの事だけじゃなく、自分のためである事もあつたはずよ。」

「ぼたん……」

「それに、薙原を探すために私達がいるんだから、ここでクヨクヨしてても何にもならないわよ」

そんなぼたんの言葉に、シルビアもフィルムも頷く。



「ぼたんさんの言う通りよ、竜胆さん」

「そうだよ、リナ。一人で悩んでないで、私達を頼ってよ」

「・・・うん。ありがとう、みんな」

皆の言葉に、リナはしっかりと頷いて答えた。

\*

「オーシャの港町 港」

一方、セレスのほうは港に来ていた。

「・・・」

リナと同じように浮かかない顔をしながら、夜の海を眺めていた。

「薙原くん・・・」

リナがユウキの心配をしていたように、セレスも同じであった。

「セレスさん」

「え・・・」

突然名前で声を掛けられ、セレスは驚いて振り返る。

「いきなり声を掛けて申し訳ない」

そう言ってやってきたのはシンであった。

「あ……」

「隣、いいですか？」

「あ、はい……」

セレスが答え、シンはセレスの隣に立ち、海を眺める。

「……」

セレスは、自分の隣にいるのが恋人の父親である事に緊張していた。

何を話そうかと考えている時、シンが口を開く。

「今回は本当にありがとうございます、セレスさん」

「え……？」

いきなりお礼を言われて、驚くセレス。

「今回の、ユウキの件についてです。本当なら私が行くべきだったのに、それに協力してくれて感謝します」

「あ、いえ……、そんな事……」

シンの言葉にセレスは慌てて答えた。

「……」

「あ、あの……」

シンがセレスの方を見ている。

「……あなたの事は、ユウキから聞いています。ユウキの担任であり、恋人となってくれたそうですね」

「え……、ええっ!?!」

シンの言葉にセレスは真っ赤になり、声を上げる。

「ユウキが私と二人でいた時に話してくれたのです。あなたに告白して、それに答えてくれたのを……」

「薙原くんが……」

「あなたの事を話しているユウキは、本当に嬉しそうでした。そして、私も安心しました。あの子の事を愛してくれる人に出会えた事を……」

「あ……」

「ふふっ……。あの子も隅におけない。このような美人を恋人にするとは……」

「び、美人だなんて……。あ、あの……」

自分を想う恋人から自分の事を、それも父親に話してくれた事にセレスは恥ずかしくなり、ますます顔を赤く染める。

「セレスさん」

「は、はい……」

シンの言葉を聞き、セレスはシンの方に目を向ける。

「これから色々あるでしょうが……。ユウキの事、よろしくお願ひします」

シンはそう言って頭を下げる。

「あ……、はい……」

セレスも、シンの言葉にそう返した。  
そして、心の中で誓いを立てた。

(竜胆さん…。フィールさん…。あなた達が薙原くんの事が好きであるのは分かっています…。けど、負けませんからね)

明日から冒険が始まる…。

新大陸での冒険が…。

## 五話目（前書き）

新年明けましておめでとございませう。今年もよろしくお願いいたします。

## 五話目

「オーシャの港町 東口」

翌日、セレス達は町の出口に集まっていた。  
今日からコルウエイドでの冒険である。

「それでは行きましょうか」

「はい。けどその前に、今日の仕事の内容を確認しておきますね」

セレスの言葉にリナはそう言った。

これより彼女達は一つの仕事を行う。

その内容は、モンスターの巢食う森の調査である。

オーシャの港町から外に出て街道を歩いていくと、道が二つに分かれていく。

一方はサハという名の町へと繋がっており、もう一方はレノの森という場所である。

レノというのは木の名前で、この木の樹皮が服の材質に適していて丈夫なのである。

そのことから家庭用の服だけでなく、冒険者での防具にも愛用されているのである。

そのレノの森に強いモンスターが巢食い、その調査及びモンスターの退治依頼をギルドに渡されたのである。

セレス達はその依頼を達成するため、これからそのレノの森へ行くのである。

「レノの森に巢食うモンスターの調査と退治、それが依頼内容です。依頼者はオーシャの町の防具メーカーの方々です」

「モンスターが巢食ったせいで、町の人達が材料を取りにいけなく

て、強行して行った人が怪我をして帰って来たって話だからね」

リナの後にフィルが続けてそう言った。

「けど、こういう仕事は本来警察の仕事じゃないかしら？わざわざ冒険者ギルドに回すなんて…」

シルビアの言うとおり、警察が動くべきなのだろう。

「ええ…。けど、最近警察のほうでは良い話を聞かないの…。一度解決した事件も、後になってみれば不自然な点があったりとかで、杜撰な捜査だったりとか…」

「そういう噂が絶えなくて、信用が落ちていった結果、仕事がこっちに回ってきたのね。はあ…」

リナの言葉にぼたんは呆れるように溜息を吐く。

「とにかく、ここで言っても始まりません。行きましょう」「ええ、そうですね。それでは行きましょう」

セレスの言葉に、リナ達も頷いて答える。

セレス達は町を出て、街道を歩いていった。

〓 街道 〓

町から街道へと出れば、そこからはモンスターとの戦いが待っている。

セレス達はモンスターと遭遇し、戦いに挑む。

「テン・ジェノサイド！」

セレスが矢の乱れ射ちで複数の敵にダメージを与え、

「はああっ！！！」

「行っけええっ！！！」

そこにシルビアとリナがそれぞれ魔法を放って、敵を蹴散らす。

「えーいつ！！！」

「ぼたんフラッシュ！」

まだ立ち上がってるモンスターには、フィルとぼたんがそれぞれ打撃技を用いて攻撃する。

これにより、モンスターを撃退した。

「やりましたね！皆さん、さすがです」

「いえ、セレス先生こそ凄いです。引退してたとは思えません」

「いえいえ、そうでもないですよ」

リナの言葉にセレスは笑顔でそう答えた。

「それにしても、レノの森までかなり距離があるよ。車でも乗ったら楽なのに……」

「こらフィル、そんな事言わないの。冒険者なんだから、これも修行のうちよ。それに、今車なんか出したら危険なのは分かっているでしょ？」

「むっっ……」



フィルの言葉にリナが答える。

「危険とは・・・、何かあるのですか？」

リナの行った危険という言葉に、セレスが尋ねる。

「あ、セレス先生達は知らなかったですね。実は、この街道には大型のモンスターがいて、車やバスなどを襲ってくるんです。そのせいで車で行く事ができなくて・・・」

「大型のモンスターって・・・、それじゃあ徒歩で行くのも危ないんじゃない・・・」

シルビアがそう言うが、リナは首を横に振る。

「ううん、そのモンスターは地面に振動を与えるものに反応する性質があるらしくて、徒歩で歩く程度なら襲ってくる心配はないわ。それより、早くレノの森に行きましょう」

「そうですね、行きましょう」

話を締め括ると、セレス達はモンスターに遭遇しては蹴散らしつつ、レノの森を目指して進んでいく。

〓レノの森〓

街道を進んで行き、セレス達はレノの森に辿り着いた。

「ここがレノの森・・・」

セレスはそう言って辺りを見回す。  
多くの木が群生し、緑の葉をつけている。

「それで竜胆さん、退治するモンスターは何なの？」

シルビアがリナにそう尋ねる。

「ええ、これから退治するモンスターは、サイクロプスよ」

「サイクロプス…。一つ目の怪力モンスターね。かなり強い部類のモンスターよ」

「ええ…。けれど、ただのサイクロプスじゃないの」

「…と言うと？」

リナの言葉に疑問を持ち、ぼたんが尋ねる。

「サイクロプスはそれほど知能の良いモンスターじゃないわ。けれど、このサイクロプスは罾を張ったりとか、そういう仕掛けをしてくるの。もしかしたら、この森の道のあちこちにも罾が張ってあつたりしているかも…」

「ちよつと妙だよね…。どこでそんな事覚えたんだろう…」

「とにかく、ここでじつとしてても始まりません。進みましょう」  
「はい」

こうして、セレス達はレノの森に足を踏み入れた。  
コルウェイドでの、初めてのダンジョンである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6691x/>

---

ぱすてるチャイムContinue After Story

2012年1月4日02時45分発行